ハリネズミと金貨

エッセイスト　若菜晃子（わかな　あきこ）

Essay　時の調べ

サハリンの州都、ユジノサハリンスクのヴォスクレセニヤ・フリストヴァ大聖堂は、白壁に青屋根、金色の塔をもつ真新しい聖堂だった。聖堂に上がる正面階段の脇には、花で飾られた、人の背の高さほどの十字架が建っていて、何度もひざまずいて熱心に礼拝している男の人がいる。私は階段を上がって堂内に入り、お祈りをした後再び外へ出て、裏手にあった階段から地下へと下りた。すると、そこはイコンや書物などを販売する店になっていた。

聖書や宗教書の棚が壁沿いにびっしりと並び、中央の大机にも書籍が整然と平積みされている。その一角に復活祭に関する小さな品々が置いてあって、それらのものを見ようと近づいたときに目に入ったのは、大量の金銭が雑然と置かれたお盆であった。

ぎょっとしてよく見ると、お盆の前には手書きの紙片があり、盆上のお金はおそらく献金だろうと思われたが、そこには小銭だけでなく高額紙幣もひらひらとのっていて、風でも吹けばあらぬところに飛んでいきそうな勢いである。この不用心かつ無造作な感じはいったいどういうことだろうか。普通、教会での献金といえば、中が見えない献金箱に入れるのであって、なぜむき出しのまま、しかもてんこ盛りで置いてあるのだろう。もしかしてここでものを買ったら、無人販売のように代金はこのお盆に入れよ、ということなのだろうか。

しかし店内には別に会計をする場所がある。やはりこれは献金だろう。けれどもそれは、言ってしまえば誰もがひょいと失敬できる状態なのだ。しかもそのお盆が本棚の脇にもメダイ（キリスト教の聖人等を刻んだメダル）のケースの前にも置いてある。これは神に試されているのだろうかと疑いたくなるほど、あまりに無防備なのである。

この教会に来る人の多くは献金をする側であって、盗むような人たちでは無論ないだろう。なんといってもここは教会であって、人は見ていなかったとしても神は必ず見ておられるのだから。もしここに貧しい人が来て、出来心で盗ってしまったとしても、それはそれでよい。献金とは本来恵まれない人たちに対して行われるものであって、その人は神の目前で盗みを働くほど困窮しているのだから。貧しい者はどうか持っていくがよい、そしてこれで今日の糧を買いなさいということなのだろう。このお盆は、お金ではないものを信じている人々の心の表れにも思われた。

それから数年後、『ハリネズミと金貨』という絵本を読んで、このときのお盆を思い出した。

――ある冬の初め、年寄りのハリネズミが森の道を歩いていると、金貨が落ちていた。ハリネズミはこれで冬ごもりのための干しキノコでも買おうと歩いていくと、リスが「おじいさん、キノコなんてあげますから、そのお金で靴をお買いなさいな」と干していたキノコをたっぷりくれる。ありがたくもらったハリネズミが靴屋を探していると、「靴ぐらい作ってやるよ」とカラスがドングリでぴったりの靴を作ってくれる。お礼を言うハリネズミに「そのお金で温かい靴下でも買いなよ」とカラスは言い、その後もクモに靴下を、子グマにハチミツをもらって家へと帰る途中、手に残った金貨をハリネズミはどうしたか――。

私は最後のページを開くまでいろいろと想像したが、結末は予想とはかけ離れていて、そのことに大きな衝撃を受けた。それはそうした結末を想像できなかった自らの卑小さに対してであり、また、崇高ともいえる答えを当然のごとくもっている人々に対する、畏敬の念であった。私はかの地で出会った人々を、あのお盆の上の献金を思い出し、彼らならばきっとそうするだろうと得心した。

彼らには神に対する信心の深さ以前に、互いに助け合って生きようとする人間の根源的な良心が宿っている――それはどの人にも与えられているはずなのだが――ように思う。

略歴
編集者・文筆家。山と溪谷社にて『山と溪谷』副編集長、『wandel』編集長を務め、独立。山や自然、旅に関する雑誌や書籍を編集、執筆。随筆集『旅の断片』で第五回斎藤茂太賞受賞。著書に『東京近郊ミニハイク』（小学館）、『地元菓子』（新潮社）、『街と山のあいだ』『途上の旅』『旅の彼方』（以上アノニマ・スタジオ）、『岩波少年文庫のあゆみ1950-2020』（岩波書店）他。小冊子『murren』編集・発行人。